

関西大学独逸文学会研究発表概要 (第107回研究会 発表会)

著者	金城ハウプトマン 朱美, 武市 修
雑誌名	独逸文學
巻	59
ページ	299-300
発行年	2015-03-20
URL	http://hdl.handle.net/10112/00017967

関西大学独逸文学会研究発表概要 (第107回研究発表会)

1. ドイツのクリスマスとメルヒェン

金城ハウプトマン朱美

ドイツのクリスマスは各家庭で伝統的に祝われる。クリスマスの時期に欠かせないものの一つにメルヒェンが挙げられる。こんにちでも、クリスマス前後にはグリム童話を素材とした人形劇や劇が上演され、なかでもフンパーディング作曲のオペラ「ヘンゼルとグレーテル」が有名である。都市部のクリスマスマーケットでは、昔話の語り手がグリム童話を語り、またメルヒェンをテーマにしたクリスマスマーケットが近年増加傾向にある。家庭では、連日メルヒェン映画をテレビで視聴できるので、家の中でも外でも場所を問わず、メルヒェンに接触する機会が多く用意されている。メルヒェンが特にこの時期に日常の風景に溶け込み、クリスマスの雰囲気盛り上げ、家族との祝祭に花を添えていると言っても過言ではない。本発表では、グリム童話やアンデルセン童話のクリスマスメルヒェンと呼ばれる話や、人気のメルヒェン映画『灰かぶりの三つのハシバミの実』（DEFA 1973年）をもとに、メルヒェンがクリスマスに欠かせない理由について考察した。

2. (講演)『ニーベルンゲンの歌』から『ザクセン宝鑑』まで —私の研究を振り返って—

武市 修

私の学問研究の基礎は第一次文献の正確な理解であり、論文作成に当たっては、原典資料によって客観的に論証することが何よりも大切なことである。京都の石川敬三先生のもとで開かれていた輪読・研究会に1980年の1月に参加し、それ以来正確な原典理解の訓練を徹底的にさせていただいた。さらに、1982年に阪神ドイツ文学会で『ニーベルンゲンの歌』のシンポジウムが行なわれることになったことが、中高ドイツ語と真に学問的に向き合うきっかけとなった。これを機に大阪でも輪読会を並行して行なうことになり、この会は以来今日まで30年以上続き、『ニーベルンゲンの歌』に続いて『イーヴァイン』、『トリスタン』など中世ドイツ叙事文学の主だった作品を読み終え、今は最大の大作『パルツィヴァール』に取り組み、40%余り読み進めてきたところである。

さまざまな作品の輪読の中で出くわす、今日のドイツ語には見られない語法や表現形式の用例を集めるうちにその言語現象を整理しまとめるという独自の視点を得られた。最初の成果が動詞 *tuon* (nhd. *tun*) の代動詞用法についての研究であった。さらに、リズムを整え押韻するための縮約形や迂言形など押韻文学であるが故の独特の表現技法が見えてきた。具体的には、動詞 *legen, ligen* (nhd. *liegen*), *sagen, lâzen* (nhd. *lassen*) の本来の形と縮約形が、リズムを整え押韻するために如何に使い分けられているかを、主要6作品のすべての用例を分析して示した。それらの成果は *Sprachwissenschaft* 誌に5度に分けて掲載された。本発表では私の研究を振り返りその後を辿った。

文学作品でない散文の法書『ザクセン宝鑑』を比較の対象にすることにより、中高ドイツ語叙事文学における表現技法の特徴を確認する作業に目下取り組んでいることを申し添えて講演を終えた。

(なお、八亀徳也氏のご講演については、本書所収の講演記録をご参照ください。)